

## 第二幕 「忍ぶ恋と婚礼」

舞台監督が客席を見ている。知人がいたら話をしてもいいし、知らない観客から語りかけられたら応対してもいい。舞台の進行が遅れていないか、時々時計を気にする。休憩が終わり、客席が静かになったところで話し始める。

舞台監督 三年経ちました。そう、太陽が千回以上も昇ったってわけ。前には生まれていなかった赤ん坊が、今は言葉をしゃべっている。大勢の若者が恋を知り、そして結婚をした。この赤穂も例外じゃない。お岩さんも結局、民谷伊右衛門の家に嫁ぎました。

第一幕は「日常生活」という題でした。この第二幕は「忍ぶ恋と婚礼」という題。このあとにもう一幕あるのですが、その題はもうお察しがつくでしょう。今は一七〇〇年、七月の七日、早朝。ただし今度は雨です。さっきまでは土砂降りの雷雨。川も増水しています。今はいったん小降りになりましたが、またざあーっと来そうです。おや、納豆屋さんが走ってきました。

納豆売りの女・お京 おはようございます。間もなく雨でしょう。ぼやぼやしている  
と納豆もずぶぬれになってしまう。急いで帰って近所の皆さんに分けてあげなくち  
や。

舞台監督 わしも二包みもらおう。家内が喜ぶだろう。

納豆売りの女・お京 毎度ありがとうございます。

四谷家からお岩が出てくる。

お岩 納豆屋さん、三つください。

納豆売りの女・お京 毎度ありがとうございます。お岩さんは里帰りですか。そうか、  
お袖さんのお嫁入りも間もなくですね。

お岩 はい。実は明日なのです。

納豆売りの女・お京 おめでとうございます。お幸せになってくださいとお伝えくだ  
さい。

お岩 ありがとうございます。

納豆売りの女・お京 目出度いので、もう一つおまけだ。

お岩 そんな。

納豆売りの女・お京　いいのよ。そーれ、やってきた。濡れないうちに失礼するよ。  
お岩さんも、ごめんください。

お岩　失礼します。納豆屋さん、ありがとうございます。  
舞台監督　こりや、ひどい雨だ。

左門とお岩がお膳の前に座る。お袖が台所で納豆を小鉢に入れ、  
かき回している。

左門　三人がそろって朝ご飯をいただくのも、これが最後だ。お前に続いて、  
お袖も嫁ぐ日がやってきた。お母さんが亡くなってから、一人でお前たちを育てて  
いた頃は、まさかお前たちが嫁入りするようになるなんて夢にも思わなかった。

お岩　お袖さんには、ぜひ幸せになってほしいわ。

左門　今、赤穂藩の經理の合理化に取り組んでいるのだが、伊右衛門殿にも協  
力をお願いしている。家へ帰ったら、顔を出すように伝えてほしい。

お岩　かしこまりました。

お袖　はい、納豆ができました。この納豆は美味しいのですよね。

左門　お前はあっさりしているな。私はお前が嫁に行くのでおどおどしている。  
これで、お岩が嫁ぎ、今度はお前が嫁ぐ。ついに私は一人になるのかと思うと。

お岩 お父様、どうか堪えてください。

お袖 遠くへ嫁ぐわけじゃないんだから、そんなに悲しまないで。しよっちゅう顔を見せに寄るから。

左門 ここまでのはじつに長い人生だった。父さんは出世はしなかったが、いい母さんと二人の娘に恵まれて幸せだった。これからお前たち二人が父さんや母さんと同じように長い人生を生きるのじゃ。

お岩 はい。

お袖 お父様、しんみりするお話をなさらないで。あたし、本当は泣きたいの。幸せで、お父様に感謝したくて、別れがさみしくて、ここまでこみあげてきている。泣きたい、わんわん泣きたいの。

左門 お袖！

お岩とお袖は抱き合って泣き出す。左門は温かく見守る。

舞台監督 二人はしばらく泣かせてあげましょう。ところで与茂七さんのご家庭はどうなっているでしょうか。与茂七さんが母上の部屋の前に手をつきました。

与茂七 母上、よろしいでしょうか。

母るい どうぞ。

与茂七 明日は何卒よろしくお願いいたします。

母るい おめでとうございます。

与茂七 小夜もよろしくお願いする。

妹小夜 兄上、たいへん嬉しうございます。

母るい お父様にお前の花婿姿をお見せできないのが残念です。

与茂七 ご存命でしたら、結婚をお許しにならないでしょう。一言「若すぎる！」で終わりでしょう。

舞台監督 るいさん、与茂七さん、小夜さん、ありがとうございます。

そもそもその始まりを、夫婦になるという重大な事件がどんなふうにあったか、知っておきたいでしょう。そこでこれからお袖と与茂七に二人が赤い絹の糸で結ばれていることに気付いたときのシーンをお見せします。

みなさんもひとつご自分の若かりし頃を思い起こしてください。そわそわして、にやにやして、熱にかかされていた一時を思い起こしてください。未婚の方は婚活セミナーで映像をご覧になっていると考えると考えてください。

それでは一年前の千種川の大願寺橋に話を戻しましょう。

第一幕で使った橋のセットが出てくる。

舞台監督 若い男女が出合い、恋が芽生え、二人が結婚するなんてラブストーリーは江戸時代ではなかなかあり得ない話なのです。しかし江戸時代でも奇跡は起こったのです。

さて、今日は午後から天気は荒れ模様で、雨と風が断続的に激しく赤穂の町を襲っています。いまの時刻は、夕方六時です。雨は小降りになりました。

おや、向こうから小走りにやってくるのはお袖さんです。すっかり綺麗な娘さんになりました。

下手から、足早にお袖が橋を渡ってくる。橋の真ん中あたりで下駄の鼻緒が切れる。

お袖 あら、鼻緒が切れてしまった。困ったわ。

かがんで、鼻緒を挿げ替えようとする。少し遅れて上手から与茂七が橋を渡ってくる。傘を持っていない。お袖は風に逆らって鼻緒を直そうとしている。与茂七に気付かない。

舞台監督 おっと、今度はすっかり立派な武士になった与茂七さんがグッドタイム

ングで登場します。歌舞伎ですと「折しも来かかる佐藤与茂七」と義太夫がドラマを作ってしまった。決して作者が安直なのではなく、時間を無駄にしない合理主義なのです。どうなるのでしょうか。しばらく黙って見ていきましょう。

与茂七 お嬢さん、どうしました？

お袖 鼻緒が切れてしまつて・・・

与茂七 貸してごらんなさい。

与茂七がお袖の下駄を手に取り、かがみこんで鼻緒を直そうとする。

お袖 まあ、あなた様は、与茂七さま！

与茂七 拙者をご存知ですか？ 驚いた！ して、そなたはー

お袖 わたくしは、四谷左門の娘、袖と申します。

与茂七 そうですか。

雨足が速くなる。二人、空を見上げる。お袖は急いで傘を与茂七の上にかざす。

与茂七　　ありがとうございます。あなたが濡れてしまうじゃありませんか。もっと自分の頭の上にかざしなさい。

お袖　　いいえ。鼻緒を直してくださる殿方を濡らしたら、天罰が当たります。

与茂七　　はゝゝゝゝゝ。それは大げさだ。

与茂七　　はい、直りましたよ、僕のシンデレラ。

お袖　　シンデレラ？（何度もお辞儀をしながら）ありがとうございます。とても助かりました。

雨足が一層早まる。雷が激しく鳴り渡る。

お袖　　きゃっ……（思わず与茂七にすがりつく）

与茂七　　これはすごい雨になった。

お袖　　どうしましょう？　仕方ないわ。相合傘で雨宿りできる場所まで行きませんか。

と、与茂七に寄り添い、傘をかざす。



与茂七 （腰が引ける）いえ、お嬢様それはいけません。若い男女が一本の傘に一緒に入るなんて。仲間に見られたら酒の肴にされます。それより町の衆が私たちをふしだらな男と女だとそしります。

お袖 そんなの気にすることないと思いますわ。だってあたしたちこのままではずぶぬれになってしまうでしょう。もっとこっちへお寄りください。

与茂七 いえ。それは困ります。

お袖 あたしは困りません。

与茂七 私は武士です。

お袖 だから何だっというのですか。とにかく橋の上は雨風が強いから、橋を渡ってしましましょう。傘を持ってくれないのですか。

与茂七 は、はい。（強引に与茂七の腕にすがる）

二人歩き出す。武士道をおもわって萎縮する与茂七と彼の腕にすがりつくお袖。与茂七は混乱する。見かねて舞台監督が登場する。

舞台監督 お袖さん、お袖さん。

お袖 はい。（与茂七は腕をほごうとする）あら、善哉屋のおじさん。

舞台監督 こんな雨の中を相合傘じゃ、ずぶぬれになるよ。さあ、お店の中へはい

りなさい。(下手の店の中へ案内する)

与茂七 いや、拙者はただ鼻緒を挿げ替えてやっただけで。ただこの人が強引で傘に入れと……

お袖 あたしの親切をわかってくれないの。

与茂七 拙者は武士ゆえ、たとえ雨にぬれようとも、若い女性と一つ傘の下に……

舞台監督 さあ、さあ、さあ、ともあれ、店の中へ入りなされ。ええ、世話の焼ける人たちだ。

お袖 おじさん!

舞台監督 座った、座った! 二人とも、雨をぬぐいなさい。(と、手拭いを渡す。

二人は頭や肩のしずくをぬぐう)

与茂七 ご親切、かたじけなく存じます。

お袖 袖口が濡れています。(とそばへ寄って、拭おうとする)

与茂七 自分で拭きますので、お気遣いなく。

舞台監督 むつまじい限りじゃ。これは口が滑った。さて、しばらく雨は上がらないじゃろう。暖かい善哉をご馳走いたしますから、どうか体を温めてください。ばあさんや、善哉、二つ。

ところで、お侍さんはもちろん浅野様のご家中でいらっしやいますね。

与茂七 はあ。わたくしは佐藤与茂七と申します。父は浅野家に仕えていました

が、わたくしが子どものころに亡くなりました。しばらくはご家老様の知り合いの家に引き取られお世話になりました。ようやく、3年前から母のもとに帰り、母と妹とわたくしの三人で暮らしております。

舞台監督 どうしてまた、こんな雨の中でけんかをするような羽目になったのですか。

与茂七 けんかというわけではございませんが……

お袖 いいえ、女性の親切をむげにお断りなさるから、お袖が腹を立てたのでござります。

舞台監督 それは武士にあるまじき振舞い。

与茂七 それには訳が……。

お袖 訳もへったくれもありません。与茂七さんはいつも世間体ばかり気にしているのです。男らしくありません。

与茂七 今晚、初めてお会いしたのですから、そんなことを言われる筋合いはございません。

舞台監督 善哉ができましたよ。話はひとまずわきに置いて、召し上がれ。体が温まるから。さあ、さあ、さあ。

与茂七 かたじけなく存じます。

お袖 いただきます、おじさん。おいしい。ねえ、与茂七さん、おいしいでし

よう。よかった。雨にずぶぬれになったけど、与茂七さんに鼻緒を挿げ替えてもらえたし。こんな幸せなことはありません。

舞台監督 二人はずっと知り合いだったのですか。

与茂七 いいえ、今日が初めてです。

お袖 違います。今日で二度目です。ほら、3年前の扇流しの夕暮れ。私は姉と一緒にした。あなたは扇を見ながら「昼は落書きして行く水に扇流し、夜は花火の映り」とおっしゃいました。あたしが振り向いたら、あなたは「失礼申した」とおっしゃって、すたすたと行ってしまわれました。

与茂七 あなたが、あの時の……まぎれもなく、あの時のお嬢様！ 奇遇ですね。

お元氣ですか？

お袖 ええ、おかげさまで。あなた様も？

与茂七 はい。

舞台監督 冷めないうちに、早く食べなさい。私はお茶を入れてくるから。

二人は、黙々と善哉を食べる。

お袖 あのこと……

与茂七 はい。(間) 何ですか？

お袖　　あたしはお転婆ですか？　みんなにデリカシーがないって言われるんです。

与茂七　　はあ。

お袖　　感情をストレートに表しすぎるともいわれるのです。挙句の果て、そんなようでは好きな人にも嫌われる、素敵な方と一緒になれないって言われるのです。だからあたし言い返すのです。好きな人に好きですって申し上げたら、一生結ばれないなら、それでもいい。自分の気持ちをお伝えしたうえで、我慢するのが本当の忍ぶ恋だっと思っております。

いえ、何もおっしゃらないでください。あたしは与茂七様をお慕い申し上げていきます、死ぬほど。あなた様は、人を好きになったことがおありですか？

与茂七　　はあ。それは……

お袖　　あたしが好きだと申し上げたら、迷惑ですか？　怒りますか？　逃げ出しますか？　笑いますか？

与茂七　　答えなくてははいけませんか？

お袖　　はい。

与茂七　　迷惑ではありません。怒りません。逃げません。笑いません。

お袖　　ほんとですか？　よかった。あの、その善哉あたしがいたでいいですか？

与茂七　箸を付けましたが、いいのですか？

お袖　はい。いただきます。

舞台監督　与茂七さん、うちの番傘をお貸ししますから、お袖さんを家の近くまで送ってあげてくださいますか。少し離れて、後からついて行ってもいいですから、無事家まで送り届けてくださいませんか。

お袖　おじさん、一緒ではまずいのですか？

舞台監督　そりゃ、夜、若い男女が一緒に歩いては大事になります。(改まって、与茂七に) 雨風がますます強くなりそうですから、くれぐれもよろしくお願いいたします。

与茂七　わかりました。お見送りいたします。大変お世話になりました。

お袖　おじさん、ありがとうございました。

舞台監督　怪我の功名といえますか、雨のいたずらといえますか、はたまた運命といえますか。巷では「恋愛はタイミング・フィーリング・ハプニング」と言われていますが、江戸時代の赤穂でも、一四世紀のヴェローナでもその通り。

ジュリエットが舞台袖から顔を出す。

ジュリエット　はいヴェローナのジュリエットです！お呼びですか？　ロミオも呼んできますね。ロミオー！（舞台裏に向かって呼ぶ）  
舞台監督　呼んでない！　ジュリエット、君の出番はもつとあと！

舞台監督がジュリエットを舞台袖に押し戻す。ジュリエットはつまらなそうに引込む。

舞台監督　もう！　せっかくいいシーンだったのに台無し！　さて気をとりなおして。

さて、もろもろ省略して次の場面は二人の婚礼の日。お芝居は時間の節約、徹底した合理主義、そして可能性の追求に終始します。一見簡単そうで、作家は苦労しているのです。

みなさん、準備をお願いします！

舞台監督が二度手を叩くと、スタッフ（もしくは他の出演者たち）たちが橋を片付け、舞台を婚礼の行われる伊和都比売神社に転換。  
舞台監督が舞台を降り、客席を一周しながら観客に語りかける。

舞台監督　では、いよいよ婚礼に移りましょう。この婚礼では私が齋主の役、すなわち神主の役をつとめます。幸せそうな二人でも、いざ結婚するとなると、言うべきことはいろいろあるし、式の進行中にもいろいろと考えることが多いようです。なにぶん人間というのは複雑なもので、どんなにいいご縁で結ばれても、心の深いところではさまざまな迷いが生じるのです。それで、この劇にもその点を織り込むべきだと考えました。そうそう、これまでこの地球というかけがえのない星に住んでいた何千万、何億という祖先の人たちも、そしてわたしたちも、たいていは二人が一緒になることで新しい人生をスタートしました。このことを忘れないでください。

最後に、この美しい花嫁花婿が、五年後、十年後はどうなるか想像してはいけません。そうです。人生の未来は決して見えないのです。何が起こるかのぞくことができないのです。何が起こっても一緒にいる覚悟に酔わせてくれるのが婚礼の魅力（魔力）なのです。私の挨拶はこれでおしまい。そう長くはなかったでしょう。

舞台監督が舞台上に戻る。

舞台は、伊和都比売神社の式場である。舞台正面奥に播磨灘があり、松風の音と潮の音がかすかに聞こえる。人々はすでに着席して開式を待っている。



舞台監督が太鼓を打つ。式の開始を告げる報鼓である。太鼓が鳴りやむと雅楽が演奏される。婚礼の参列者たち（アマンダとローラ、ジュリエット、三人姉妹以外の全員）が並んで座り、おしゃべりをしてる。

お色

（甲高い声で）与茂七さんとお袖ちゃんが一緒になるなんてねえ。赤穂一の美男美女カップルじゃないの。二人ともちよつと若すぎる気もするけど。うまくいくといいわねえ。

一番客席側に座っていたお岩が客席のほうを振り返って、目頭を押さえながら観客に話しかける。

お岩

どうしてこんなに涙が出てくるのかしら。お袖はあんなに幸せそうで、泣くことなんて何にもないと思うんですけどね。それでもなぜだか一抹の不安が残るの。

上手側の舞台前方端で、お袖がお岩を呼ぶ。  
お岩は涙を拭いてお袖のところに行く。

お袖 お姉さん。

お岩 どうしたの？

お袖 お姉さん、私お嫁に行くのなんかいや。

お岩 お袖さん、心配することなんて何もないのよ。与茂七さんは立派な方じゃないの。

お袖 どうして今のままでいちゃいけないの？ 帰りましようよ。私はずっと父上のお世話をして暮らすわ。

お岩 そんなこと言わないの。与茂七さん、ちよつと。

お岩、上手奥の与茂七を呼ぶ。

上手から婚礼の衣装を着た与茂七が出てくる。

お岩 お袖さん、あなたはこの赤穂で一番素敵な方と一緒にになるのよ。与茂七さん、大事な妹をよろしくお願いします。

与茂七 ええ、わかりました。お任せください。お袖、私はできるだけのことをするよ。私にはあなたが必要なのだ。

お袖 与茂七さん、いつまでもお袖の傍にいてくださいね。いつまでもよ。

与茂七とお袖は手を取り、見つめあう。  
太鼓が鳴りわたる。神に式の始まりを告げる「報鼓」である。

お岩

みんな待っていますよ。もうこれで心配はないでしょう。さあ、急いで。

お岩が先導し、舞台奥の上座に与茂七とお袖が座る。一同はおしやべりを止め、拍手で迎える。

アマンダとローラ、ジュリエットが下手端に、三人姉妹が上手端に出てくる。

斎主の合図で、全員が起立し、一度参拝する。

「修祓しゅぼつの儀いっぼい（斎主一拝）」が行われる。斎主が二人の結婚を神に報告する。

巫女がお神酒を携えて二人の前に進む。盃を二人の手に渡す。「三献の儀誓盃の儀（三三九度）」となる。二人は三口に分けてお神酒をいただく。

お色

ほんとにすばらしいわね！　こんなにいい結婚式を見るのは何年ぶりか

しら。私はいつだって夢を見てしまうの。夢の中で、自分が花嫁になって緋毛氈の上を歩いているの。三三九度のお神酒をいただいて泣いてしまうの。若い人たちが幸せになるのを見るのが大好きで。ああ、ほんとにすばらしい。

式の進行中、ローラはガラスの一角獣を磨いている。

ジュリエットは教会で祈りをささげている。

それぞれの時間が並列して進んでいる。

誓詞奏上せいしが行われる。新郎が誓いの言葉を読み始める。とウイングフィールド家のシーンとブローゾロフ家のシーンが同時進行する。

誓詞が終わると、玉ぐしを供える。

アマンダ　あたしたち、これから一生涯をどうやって過ごすの。家に閉じこもって、人さまの幸せを窓からのぞくだけ。あなたはずっとそうやって、ガラスの動物たちと遊んで暮らすの？ あんた、だれか好きになったことはないの？

ローラ　あるわ、一人だけ、好きになったことが。

アマンダ　そうよ、結婚よ！ ローラ、あんたもそうすればいいんだ！

オリガ　（二人の妹たちを抱きしめる）軍樂があんなに高らかに、勇ましく鳴っている。心から生きていたいという気持ちになってくるわ！　わたしたちの苦しみは、後に生きる人たちの喜びに変わって、幸福と平和が、この地上におとずれるだろう。そうしていまここに生きている人たちを、思い出して、きつと祝福してくれよう。ああ、わたしのかわいい妹たち、生きていきましようよ！

玉ぐし拝礼が終了する。巫女たちが鈴をもって前へ出る。二人に鈴を渡す「巫女舞」（越天樂）になる。4人の巫女たちが舞う。

舞台監督　だれかが誰かと結婚する。新しい所帯、七五三の宮参り、浅草の花やしき、芸事、琴・三味線・踊りなどの事始め、脳溢血、初孫の顔、臨終の床。（観客を見て）そう、人はみな「自分だけの特別な人生」というドラマを生きていると思いがちですが、実は今隣に座っている人たちとたいして変わりはない。みんなだいたいおんなじ。自分だけが特別だなんて思っているのは自分だけなのです。さあ、音楽を続けて！

「お鈴の儀」になる。巫女たちが与茂七とお袖に向かって鈴を振る。美しく優雅な舞いと鈴の音が寿の

場を清める。

お色　　こんなすばらしい婚礼はほんとうに初めてだわ。あの二人、きっと幸せになるわ。幸せが肝心、それがあたしのモットー。そう、肝心なのは幸せになることよね。

ジュリエット　　ねえ、ロミオ、わたしってほんとうに愚かな娘。だからはずっぱな女とお思になるかもしれないわ。でも信じて、控えめに見せる手管を知る女より、わたしのほうがずっと真心があることを。

もしあなたの愛のお気持ちさまことのものであり、結婚ということを考えてくださるなら、明日、あなたのもとへ人を送りますからご返事を、どこで、いつ、式をあげるか知らせてください。わたしはわたしのいっさいをあなたにさしあげます。わたしはどこへなりともあなたの後についていきま

お色　　あたしはいつだって泣いてしまうのよ。わけが分からないけど、泣けてくるの。若い人が幸せになるというのは、ほんとうに素晴らしい！

全員起立して、齋主に合わせて神前に向かって一度拝礼を行う。  
太鼓が打たれ、式の結びを告げる。

舞台監督　みなさん、幸せな婚礼を見届けたところで第二幕の終わりです。五分間の休憩です。